

「1000年の山古志」に予想を大きく超える141名参加

当日の様子をリアルに伝える市民新聞記事

<http://www.lcv.ne.jp/~mourima/10.2.14kekkakiji.pdf>

「どうしてこんなにたくさんの方が来るのでしょうか」

実行委員として当日も奮闘していただいた青年女性が、真顔で尋ねます。予約の電話も速いペースで推移し当日までに100名を超えていましたが、それも大幅に超える方々が来られたのです。どう見ても、初めてお会いする方が半数を超えています。4回上映しましたが、どの回も終映時にかんりの拍手が沸き、私の話(末尾に記載)にいちいちうなずき、帰り際にも「とっても良かった」と晴れ晴れしたお顔お顔。

感想

- ・「震災の時に山古志に支援に行き、知っている方も登場していましたので、懐かしく観させていただきました。地震被害に遭われた人たちの生きる力を教えていただきました。山古志ガンバレ！」
- ・「山古志の言葉で描かれていたのが良かったです。私の郷里も山古志と同じ日本の原風景という感じで、この映画を観ていて言葉とか行事とか、人との結びつきが似ていました。」(1950年代生まれ)
- ・「とても良かった。これからも、今回のような、街の映画館で上映しないような映画を上映して欲しい」

すわこ文化村 代表理事 毛利正道



各回上映終了後での毛利の発言

昨年10月に公開直後のこの映画を観ました。全村崩壊という事態の中で、今や73%の村民が帰村して住んでいる。この「奇跡」のベースに、同じ集落の人びとを家族とも思う繋がりがあったのです。地震直後の体育館避難生活のなかで、プライバシーが丸見えだから段ボールの仕切りを立てては、との提案があったときに、「いつも見ている同じ集落の人びとの顔が見えると安心する」と言って、この提案を断ったのが山古志の人びとでしたし、仮設住宅にも集落毎にまとまって住まいましたのです。

この映画を観た直後に、今当地で同居している82才の母のお供で、山古志の近くの新潟県旧小国町の法末集落に住む90才になる姉夫婦を訪ねました。46戸ほどの奥深い豪雪地の集落で、ほとんどの家が全半壊したのですが、85%もの住民が帰村して生活していました。姉御夫婦も、地震で家が住めなくなったため、仮設住宅から帰ったあとは手直した作業小屋で暮らしていて、そこを訪ねたのです。65才人口が過半数を軽く占める限界集落であり、バスも週に3便しか来ないところですが、急病人が出れば若い人が車で病院まで運んでくれるし、大雪が降ればボランティアの雪かき隊や長岡市内に住むこどもたちが駆けつけてくれる。90才の夫さんは、今も軽トラを毎日のように運転していて、いわく「この辺では、70代・80代は現役。90才になって初めて老人と扱ってもらえる」と余裕綽々。そこに隣家に住む私の母より1学年若い幼なじみとその奥さんが訪ねて来て、「年金程度の収入だけでも、こうして互いにお茶のみに行ったり助け合ったりして暮らしている」などと話が盛り上がります。

私は、山古志の映画と小国の暮らしを見聞きし、大震災でも当地で次々に起こる水害大災害があっても、全面的な復興までは時間がかかり、場合によっては孫子の代までかかるかもしれないけれど、このように住民が繋がっていればなんとかなる、立ち直れる、と実感しました。その意味では、山古志の人びとのように生まれたところで死ぬる人びとは幸せだと思います。今は、テレビでも無縁社会・孤独社会などと言われる時代ですが、生まれたところで生きているのでない人びとも多くいる地域では、とりわけ、このような暖かいつなかりを再生する努力が必要なのではないでしょうか。私たちの「すわこ文化村」もそのような気持ちで結成したものです。一人ひとりが小さなことからでも始めてみませんか。お隣にお茶を飲みに行く、とか、お隣をお茶に招くとかから始めてみませんか。

こんな気持ちから、この映画の上映会を企画した次第です。多くの皆さんから観ていただいて本当にありがとうございました。